

科学と迷信

新城新蔵

科学と迷信という演題に就いて、これから暫く話したい、何方かと云えば神戸のような新開港地には迷信が多くなかろうと思う、けれども實際世間を広く見渡すと、何処にも彼処にも可なり根強く迷信が行われている、その迷信は種々の方面に亘っている。今その中で科学と関聯した迷信のことを云おうとするのである、一体、科学とは凡てのものを合理的に觀察する——即ち自然界の現象を合理的に判断して、その依つて来るところの原因結果の法則を闡明すると共に、それに依つて得たる知識を以て社会人類の福利増進に用ゆるのが科学である。故に人間の生活を便利にし都合よくすることを科学の使命とする。この意味で汽車や汽船やラジオなど、社会生活を至便にする科学の応用が至る所に見出される。畢竟するに近代の文明は科学の文明であると云つても過言ではない。然るに何という稚戯であるか、合理的に考えて些も理窟に合わないことで、何か甘いことはなからうかと念願懸ている人がある。そういう人々が得てして迷信に囚われ易いのである。迷信の大部分は畢竟科学的には成功すること能わずして邪道に陥りたる失敗の記念物たるに過ぎないのである。だから之れを極端に云えば三文の値打もない、古靴を勿体ながらのが即ち御幣を担ぐことであり、迷信である。換言すれば人生の福利推進に失敗した遺物を担ぐのが迷信であると云わねばならぬ。例え

て云えば汽船があるのに小船で遠洋航海をしたり、電信があるのに飛脚を走らせたりするのが迷信の愚である。も少し具体的の例を云えば、医学が発達して居るにも拘らず祈祷とか禁圧とかを信ずるのも迷信の一つで、また建築に就いても故なく鬼門を忌みるのも迷信の一つである。そこで私が今云おうとする科学と迷信とは到底対立することを許さぬものであるが、講演の便宜上これを一纏めにして話すことにする。

今日行われて居る所の多くの迷信の中で最も重きをなすものは九星の説であろう。こう云つても未だ年の若い人は知らないかも知れぬが、一家を持って居るぐらいの大人であれば大部分九星説に耳を傾けて居ると思う。その証拠には何か儀式を行う際には日の吉凶を氣遣う、また商売を初めるにも九星の判断を尙ぶ、嫁を貰うにしても今年二十一歳の女は丙午でいけないと否み、建築をする場合には方位方角が何うのと九星を担ぎ出す、これ等は凡て愚にもつかぬことで別段何等の根拠があるわけではない、それにも拘らず何でも彼でも九星の判断に訴えるのは実に奇怪なことである。さて九星とは何？これに就いて一応その由来を申し上げたい。

所謂九星とは周囲の方角を八つに分けて、これに中央を一つ加えて九つの方位を定め、それに吉凶の色をつけたものである。依つて昔は九方色と云つた。これが九星に変わったと云つても別に天文とは関係がない、九星の起因は支那日本に古くから行われていた五行説である。五行説とは天地間のことを五つに分けて考える説で、この五行説の元は天文から間違つて起つたのである。今から二千年三千年前の未開時代は全農時代であつた、故に五穀豊饒天下泰平と称したのである。而して農業を善くするためには立春とか立秋とかの季節を正確に知る必要があつた。併しこの時代には未だ一年が三百六十五日であることが知られていなかったの

で、夕方の空に瞬またたく星の色の模様を見て春景色の立つを知り、種蒔きを思い立つという風な塩梅あんばいで、年中夕空の星の色合を見つめて季節の推移を適確に判断していたのである。その習慣が今も猶なほ伝わって百姓する人は空の星の模様を見て季節を観測する風が残っている。太古にはそうして農作の準備をしたり種蒔き苗植えをしていたのであるが、紀元前五六百年前、我国の神武天皇時代に、やっと一年が三百六十五日四分の一であることが分った、これで都合つひのよい暦が出来たのである。この時代は支那の春秋時代で孔子が生れる前であった、茲こゝで天文暦法の一段落を告げると、又これから一つの慾が出来たのである。

今まで暗中模索していた春夏秋冬の四季の変化を机の上で明瞭に知ることが出来るようになると、次に二年三年乃至十数年後に突発すべき不時の災禍、すなわち旱魃であるとか、疫病の流行とか、戦争が起ることを前まえ以て豫知する方法はないかと思考したのである。従来久しく空の星をにらよんで漸ようく一年の暦をあみだしたことに味をしめて、こう考えたのも無理はない、そして一心に星の運行を見つめて居ると、大体に無数の星は形を変えずして東から西へ動いて居るが、その中に稀に位置を移動させる少数の星があることを発見した、それはプラネット、即ち遊星或は惑星とも云うそれであった。その中の火星は二年、木星は十二年で太陽系を一周するのである。そこであれを注意すれば洪水とか戦争とかの前兆が分るであろうと思つたのである。その星は水星、金星、火星、木星、土星の五つを見出したのであるが、この五つの星の位置の変化に依って何か地上の現象に異変が生じないであろうかと仔細に観測したのである。事実じじつに於て遊星の運行と地上の現象とは全く関係がないのであるが、二千年以前には東洋に於ても西洋に於ても同じ間違まちがいに陥っていたのである。西洋では日月五星の位置によって地上の現象を支配されるものと信ずる念が深かつた、そして王の運命が

決まるものと思つていた。後には人間全体の運命は生れた時刻に木火土金水の五星と日月の位置如何によつて決定されるもののように信じられたのである。その結果、生れた瞬間に於ける日月五星の位置をカードに記入して、それを自分の運命票とした、それが即ちアストロロジー（星の占い）というものである。若しそれが事実であるならば生れてから死ぬるまで何等努力の必要がないと云わなければならぬ、つまり吉い星の下に生れた者は生れながらにして幸運で、凶い星の下に生れたものは生涯不運であるということに帰着する。こうした馬鹿氣た運命説が近世にまで支配して居るのは実に恐るべき迷信と云わねばならぬ。

東洋に於ても又これと同様の迷信がある。併し多少異なるところは西洋のようにオギアと生れると同時に星の運命票を作つて置けば文句はないけれども、それが手遅れて五六十年も前に溯つて、何年何月何日何時何分には日月五星が如何なる位置にあつたかを調べて見ようとすると、中々容易ならぬ面倒である。そこで支那ではもつと簡便に抽象的に考ふる工夫をした。それは宇宙の万象を五つの要素に割り当てる。即ち木火土金水の五つものが組合つて天地の現象が出来るという考え方に基いて、一切の事物は木火土金水の何れかの性質を有するものとして五行を配当したのである。そして生れた年の星廻りによつて人間の性質までも或は火性とか土性とか割当たのである。年毎に五行の循環するのは無論のこと、四季にも五行の法則を當嵌めて、春は木の芽立つ時季であるから木、夏は燬くように暑いから火、秋は金、冬は水に配当した、ところが残る一つの土の持つて行き所がないので、種々苦しい無理算段をした結果、遂に春夏秋冬の四時の末より一時の五分の一、即ち十八日宛を取つて土の領分にしたのである、これが今日まで四季の土用として残つて居るのはこの土の配当に四苦八苦した名残で、要するに五行説無理こじつけの記念物に他ならぬ。そうして

天地間一切の現象を説明せんがために。あらゆるものは五行の性質を帯びて居るものとし、従つて五星の運行と地上の現象と相関聯するものと考へたのが五行説である。これ等の考へが間違つて居ることは今更説明を要さぬ、然るに二千年來支那日本に於てこの五行説が信じられて居るのである。一方、西洋に於ける日月五星の位置によつて運命が定まるといふ説に、すくなからぬ動搖を來たすべき事實が現れた、と云うのは西曆一七八一年、今からザツと百四十年前に英国のハーシエル氏が従來発見されている五星——すなわち木星、火星、土星、金星、水星の外に、天王星の存在を発見したのである。そこで新発見天王星を入れるか否かについて大いに迷つたのであるが、事實は五星の兄弟に相違ないから入れねばなるまいといふことで、仕方なく天王星を入れることにした。次いで西曆一八四六年、今から約八十年前に又もや海王星の発見について問題が生じた、併ししかこれも事實なれば致方いたしかたがないといふので更に海王星を加へることになった、そうして今日のアストロロジ―は以前の五星の外に天王星、海王星を加へて居るのである。すると、それまで五星を信奉していたのは正しく間違であつたと白状することになる。然らば其の申訳もうしわけに切腹すべきところである。何は兎もあれ日月五星の位置を云々したアストロロジ―（占星術）の虚妄の説は、ハーシエル氏が天王星を発見した時に、直ちに死命を制せられたものとして潔よく打ち切るべきが本當であつた、而してアストロロジ―が妄誕無稽であることを痛烈に宣告した功に依つてハーシエル氏は貴族に列せられた。

それと同時に東洋の五行説もやはり五つの星より勘定かんじょうせられて居るのであるから、西洋のアストロロジ―ご同様に、天王星の発見と共に打ち棄てるべきが當然である。西洋の占星術では人の氣質及び其の一生の運命は、その出生の瞬間に於ける日月五星の位置によつて定まるものとするのであるが、支那及び日本で行われ

て居るものでは、其の始めの考えはやはり五星の位置であつたと思わるるが、やがて一々複雑なる五星の運動を引合に出すことを止めて、その誕生又は受胎の年月日時に相当する干支の如何に依り五行説によって判断することにしたものである。人は活き物で其の性質は決して木火土金水などの死物に比較すべきものではない、だが併ししか仮に人の氣質が木火土金水の五つに分類することが出来たとしても、二人の人の關係を所謂いわゆる五行の相生相剋そうこくの理によって判断するのは間違まちがひつて居る。一体相生相剋そうこくというのは其の始まりは単に五行に順序を附するために案出したもので

生数の順序にて 水火木金土

相生の順序にて 木火土金水

相勝の順序にて 水火金木土

という様な順序を附し、場合に依つては三つの内から都合つじうの好いものを用いたものである。生数の順というのは五行の生れた順序だというのであるが、単に勝手にそう定めたという以上に何等なんらの理もない、相生というのは五行相互間の關係で、木は火を生じ、火は土を生ず云々というのであるが、これも木が摩擦によって火を生ずるが如く、金も摩擦によって火を生ずるので、金は火を生ずるとも云えぬことはない、然しかるにそうとは云わずに、金は水を生ずるといふに至つては、トント首肯されぬ。これを無理からこじつけて解釈するなれば、金を屋外に曝して置くと夜露が生ずる。それで金は水を生ずると謂いうのかも知れない。こういう出鱈目でたらめの相生あいしようが悪いというのを悲觀して、誤つて死ぬものがあるのは太はなだ慨嘆に堪えない。

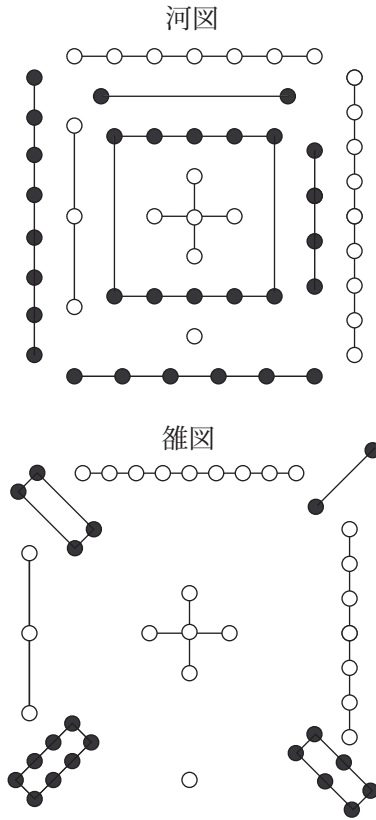
次に相勝まかというのは文字通り相勝まかるといふ意味で、即ち水は火に勝り、火は金に勝るまか云々というので、そ

れぞれ何か一つ他に勝る性質があることを目当として順序を附したものである。こういう考え方の起原は紀元前四五百年前のことで、当時野心満々の群雄が各地に割拠して互に天下を取ろうと争うて居る時代に於て、戦わずして自然の成行にまかせて、あわよくば天下の覇権を握ることが出来るような都合の好い占いをすることに始まったのである。例えば今が水の時代であるなれば次には木の栄える時代が廻つて来るといふ風な判断を下すので、これを現代の言葉に直して云えば所謂熟柿主義に該当するであろう。

更に六朝頃に至りて相勝の勝の字が同じく「かつ」の意義を有する剋に転じ、再転して剋他の意味の「きじる」となり、相剋になつてよりは互に軋轢衝突せるといふ様な意味が加わるに至つたものである。例えば火と水とは相剋で、水性の人と火性の人とは性が合わずお互に軋轢するものとして居る、併しながら確か相勝説の起原とも見るべき左伝という書物には、水は火の牡なりとも、又火は水の妃なりとも書いてある。分り易く云えば、水と火とは陰陽夫婦の如く相助くるものといふ意味を含む、それにも拘らず後世に於ては火と水とは相剋であると云うのは矛盾ではあるまいか、成程、考えようによつては火に水を注ぐと消えるから悪いとも云える、併しながら、深く考えて見れば自然界の万物は凡て太陽の熱——即ち火と地上の水との調和によつて所謂雨露の恵みを享けて生命を保つていたのである。もつと手近な例を挙げて云えば、私達が毎日食べて居る米の飯は火と水との調和によつて焚かれて居るのではないか、すれば火と水ほど関係の深いものはないと云わねばならない、だから自然に倣えば、水性の人と火性の人とは相調和して尤もよく性の合うものであるだろうと思われる、にも拘らず水性と火性とが相剋だ等と矛盾したことを謂うのは最も無稽の甚だしきものと云わねばならぬ。

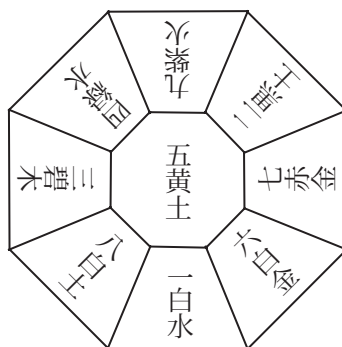
然るに今から千二三百年前に九星しゅうせいというものが起った、この起因は次の如き数字の配列が靈妙の感を深からしめたのに基くのである

四	九	二
三	五	七
八	一	六



右の図に配列した数字を縦からでも横からでも斜からでも何れも三つ加えれば十五になる、丁度当今流行して居るクロスワード・パズルのようなものである。これを大発見として宛然鬼えんぜんの首を取ったように思い、且つ亦、天地の一大真理を発見した如く矢鱈無性に珍重やたらむしようだったのである。そして之れを雉書ちくしょと云い、龍の脊とか亀の甲とかに書いて天から授かった神秘のように云いふらしたのである

が其の実は今から二千年ばかり前の漢代に、誰かが発見したものであろう。西洋方面でも昔は魔方又は方陣と称えて不思議がったが、今から見れば数字的遊戯の一つで不思議でも何でもない、やがて之れを土台にして九星を作ったのである。それには又次のように鹿爪しかつめらしく書いて、如何にも易のように見えるようにした。



上の図の通り一から九までの数に色をつけて、一白、二黒、三碧、四緑、五黄、六白、七赤、八白、九紫と色別したのであるが、これには何の理由もないことは云うまでもない、併し易学の上では白と紫とが吉で他の色は凶いと云っている。その外に木金土金水の五行を割当て、毎年星廻りが循環するように拵えたのである。そして其の廻り年の星が中央——即ち中宮に座ることになる。今年六〇四年に該当する支那の隋時代の甲子の年を起算点として、此の年に中央の中宮に置いたのが一白である。それから次の年に九紫、八白、七赤という順序で逆廻りに循環することにしたのである。そうして甲子の一白を起点として循環を始めてから一千二百六十年を経過する間に、甲子の一白を七周して、今から六十三年前の西暦一八六四年、我国の元治元年に八度目の甲子の一白に当たったのである。その次の慶応元年は乙丑の九紫次いで八白七赤六白とめぐりめぐって六十一年目の大正十三年の干支は甲子の年であったが、九星は一白でなく四緑であった。つまり干支の甲子から甲子までは六十年で還元するのであるが、干支と九星との合致するのは其の三倍、即ち百八十年かかるのである。そして初めの六十年を上元と云い中の六十年を中元と云い、下の六十年を下元と称している。

ところで今から百三十四年前までは、日本の九星家と支那の九星家と九星の繰り方が六十年間違っていたのである。我国の文化十年頃に支那から渡って来た書物によって匆惶として訂正したことが記録に残っている。そこで私に云わしむれば、我国の九星家は其の時よろしく切腹すべきものである。そしてそれ以後断じ

て九星の存在を許すべからざるものであった。然るに凶々しい九星家が今日まで猶且生存して居るのは実に奇怪である。

これを御覧なさい——曆の本をば取り出して見せながら——今でも毎年こういう誤魔化し曆が無慮何百万と売り出されている。秦の始皇帝なら直ぐ焼いてしまふであろうから世話がないが、今の世の中にはそういう暴君がいないので却って仕末が悪い。兎も角、如何がわしい偽曆の類は嚴重に取締るべきものである。故に明治初年に太政官布告（一八七二年太陽曆を採用するにあたり、旧来の曆の頒布が禁止された。ただし翌年に限り許可された）を以て禁止されて居るのであるが、多年の習慣を拒みかねて多少大目に見て居るのを奇貨として、未だに九星曆が跋扈して居る。こんなものでも私は二十銭出して買ったのであるが、不可思議なことには九星曆に幾多の異本がある。茲に私が持って居る大正十一年の曆三冊について見ると、日々の吉凶が三冊共相違している。この原因は支那から渡って来た種本の解釈に四通りの相異があるからである。現に私が持っている此の曆三冊を見較べて、すべて一致した黄道吉日を選んで婚礼の式を挙げようとすれば、一年に一日として吉日が見出せないのである。そうかというと或年には偶然にも一致して居ることがある。現に今年の曆は大抵一致している。斯様な事実に徴して見ても凡そ紛れ当りに判断している不確実なことが分るのであろう。

次に家相の吉凶も九星説にて判断して居るのである。百三十四年前の寛政文化の頃までは五行説所謂八卦に依つて判断していたのであるが、それ以後次第に九星にて判断するようになった、これとて到底当にならぬのである。家相について最も八釜敷やかましいう所の鬼門と九星とは何等關係がない。鬼門の出所は支那の古い二千年も前の小説にあるくらいのもので、支那に於ては別段恐しいとも何とも思っていない、要するに今か

ら二千年乃至二千二百年前頃に誰かが作った小説の中に、

「東海の中に度朔という山があり、山の上には枝の廻り三千里にも及ぶ大なる桃の木がある。その東北にある門を鬼門と称え一切の鬼（亡霊）の聚る所で、これを神荼、鬱壘という二人の兄弟が守って居り、天帝の命に依つて是等の鬼を検閲し、若し人に害を及ぼしたる鬼があれば、これを葦の索で縛つて虎に食わしめる」

と云うようなことが書いてある。この小説がもとになって或は東北の方を凶方とするものが出来たのである。併し支那では現在でも鬼門のことはやかましく云わない。それも其の筈で支那では元代に盛んに起つた演劇では役者が舞台に出入する口を鬼門と称えて居る。これは我邦の謡曲能に於て幽霊物の後シテは物語主人公の亡霊である如くに、歴史物の役者は故人の精神が現われて活躍して居るのだと考うるためで、故人の亡霊鬼が出入する門なるが故に鬼門と称えて居るのである。然れば花道の鬼門なら恐いことはないに違いない、然るに日本では鬼門を無暗に恐れて居る。そこで其の由来を尋ねて見ると或はこうではなからうかと思ふ。一体、鬼門というのは東北を指すので、京都から云えば比叡山が鬼門に相当する。その比叡山の僧兵があばれて仕様がないたため、某天皇（白河天皇）をして朕が心のままにならぬものは。鴨川の水と双六の賽と比叡山の山法師——即ち鬼門の坊主——と宣せられたなどであるから、茲に於て鬼門の恐怖を感ずるようになったのではあるまいか。

ついでに丙午の迷妄について一撃を加えて置こう。明治三十九年丙午の年に生れた今年二十一年の女は火のように烈しい気象を有して居るといふので、兎角嫁の貰い手が無い。男には何の差支えもないが特に女に

限つて忌み嫌われるのは太だ不條理である。これは五行説に於ても九星に於ても認め難い間違である。何となれば丙午ひのえうまという干支そのものだけを直訳した誤解に他ならぬのである。迷説者の謂う所によれば丙ひのえとは「火の兄え」の略字であつて、即ち火の性を意味し、十二支の午うまも火の性である。だから丙午は火と火が重なつて恰あたかも烈火の勢いを有すといふので酷く嫌忌されるのである。されば此の筆法を以て甲子を解釈して見ると、十干の甲きのえは木の性であり、十二支の子ねは水の性である。それから丙ひのえ子は何と何とであるかと云えば、前の解釈によつて火と水であることが分るであらう。そうすれば甲きのえ子の「木と水」丙ひのえ午の「火と水」とを混合したもののが何になるかの謎が生じる。これを解決するのに餘程苦心したようであるが、結局、五行説で片付けようとする錯誤に陥つたのである、近い例を云うと昨年は乙丑きのとの年であつたが、乙きのとは木、丑うしは土である。そして「木と土」との混合を海中うみの金かねといふヘンテコな解釈を下している。これは全く理窟に合わない話である。が併しかし、今暫しばらく五行説に耳を借して丙午ひのえうまの本性を尋ねて見るなれば、干支の判断のごとく猛烈な火性ではなく、その反対の水性である。而しかも天の河の水といふのである。天の河と云えば何かしら優しいローマンスのある所ではないか、すれば縁談には殊更縁故の深い性質であると云わねばならない。こう考えれば縁談には寧むしろ歓迎さるべき適性ではあるまいかと思う。また一方、九星に依れば明治三十九年の本命性は四緑の木である。こうして五行説では天の河の水、九星では四緑の木であつて、何方いずかたにしても火ではないのである。にも拘かわらず丙午ひのえうまだから火の如き性質であると曲解したのは、強しいてケチをつけると云うより他はない。それも察するところ徳川時代に発生した根拠のない妄説に過ぎないのである。支那に於ても丙午ひのえうまの歳には火事が多いという伝説があるにはある。そこへもつて来て徳川時代の物語に八百屋お七という小娘が恋に

狂うて家をも身をも火に焼いた一件から、お七が丙午ひのえうまであったということに附会ことづけて、丙午ひのえうまは火のようであると一犬嘘を吠ゆれば万犬実を叫ぶの類で、遂にこうして取るに足らぬ虚妄の浮説が全般に流布したのであらうと思われる。

兎も角かく、五行説、九星の起り始めには古い科学の權威と認められ、宇宙の原理と信じられていた。併しかし世の中のことは凡すべて所謂八卦いわゆるの理窟すく通行に行くものではない。世には往々偶然の出来ごとが突発する。早い話が少しも悪いことをしない福德円満の善良な人が偶然の事件に出喰でくわして、思いもそめぬ電車に轢ひかれて非業の最期を遂げることがある。又は其の他の不慮の災難に出会うことがないとは云えない。併しかしながら熟々つらつら思うに、厳密に云えば真に偶然の事件なるものは決して存在して居らぬ。一見して偶然突発の如くに見ゆるものも、仔細に其の発生の跡を吟味して見れば、現象発展の径路は常に明かに追跡することが出来る。若もし徹底的にあらゆる條件を前もつ以て調査することが出来れば偶然ということは決してない筈である。空中に浮遊する塵埃じんあいの一一の運動をも凡すべて合理的に説明し得べき筈である。だから電車の衝突とか汽車の転覆のごときも一概に偶然の出来ごととは云えない。ただ吾人の能力には限りあり、数限りなき微細の條件に一一注意することとは到底不可能なことで、止むを得ず吾人の注意を或る程度までに止め、それ以下は打切るの外はないが、斯くして切捨てたる零碎なる原因——所謂いわゆるコンマ以下の端数たまたまが偶々累積して大なり小なりの結果を生ずるに至れるものが即ち所謂偶然いわゆるの現象なるものである。これに対しては吾人は最早もはや必然法を以て推究することは出来ないが、なお蓋然率確率（率）によって其の大概を率することが出来る。屢々しばしば起るか否か、その大きさが若干の程度に達する蓋然率は何程か等のことは大数計算法大数の法則。ある事象を何回も繰返すと、一定事象の起こる割合は回数が増えるに従って一定値に近づくという経験法則）によつ

て攻究することが出来る。そこで出来るだけの注意を以て衛生保健法を講じたり、なお早晩免れ難き死亡に對する保険、出来るだけの注意を以て豫防法を講じて、尚偶なわまたまに避け難き火災に對する保険等の如きは、要するに避け難き偶然の事件による損害を大数計算法によつて軽減せんとする方法に外ならぬ。前述の保険の他に海上、傷害、其の他幾種類もある。我国にはまだ出来ていないけれども外国には汽車に乗るにも保険が出来ている。これが最も合理的なる方法であると信ずる。

さて偶然の事件に對する古代の人の処置法は大概二た通りある様である。その一は卜筮等の方法によつて之れを豫知せんとすること、その二は神仏に祈願して其の加護によつて災難を除けようとしたのである。だが併し何方も間違つた方法であると云わねばならぬ。先ず第一、占筮せんぜいに他頼たよるのが愚の骨頂である。何故なれば売卜者が尤もつともらしく捻ひねくる所の筮竹ぜいちく（竹を削つて作つた長さ約四〇センチの細い棒。普通五〇本）とか算木さんぼく（長さ約一〇センチの四角な棒。六本がひと組）とかいうものが無意味である。易は孔子も信じたというけれども、事實は孔子以後に起つたものである。易すなわち八卦の成り立ちは、黑白兩極端の外に、これを四分し八分し六十四分して、種々の可能なる中間的方法を講究して慎重なる審議によつて疑を稽かんがうる方法である。故に易の考え方、解釈方法は一概に値打がないとは云えない、併し、これを占筮せんぜいに用いたのが間違まちがの元であると云わねばならない、今なお用いられて居る三十六變筮法、十八變筮法、略筮法等は要するに六十四卦の何れにも偏せず、等分の偶中率（確率）を有する方法たるに過ぎない。だから易の當る偶中率は六十四分の一で、外れる偶中率は六十四分の六十三である。つまり決して當らぬ方法であると云わなければならぬ。だが併し八卦しかの占が偶なまたまに中る場合がある様に見えるのは、畢竟易者が多年の經驗に徴して鹿爪しかつめらしい面をして筮竹ぜいちくを弄りながら、大部分常識判断を加えて、これを筮竹ぜいちくに

現われた六十四分の一の卦に仮托して喋々（しきりに）するのである。故に八卦の筮法は常に外れて居るので、偶（たまたま）に当るのは易者の常識判断に過ぎないのである。だから口から放題な出鱈目（でたらめ）が云えれば立派な売卜者となることが出来ると云える。加之（しかのみならず）、今日の八卦見はもつと不都合な真似をしている。それは何かと云うと、易と九星とは自ら流儀を異にするものである。それにも拘らず今日の八卦には平気で九星を取り入れて居る。これは洵（まこと）に不埒至極（ふちうち）であると云わねばならない。

そこで今まで云ったことを要約すれば、あらゆる迷信に基づく不合理な処置を排して、世の中の凡て（すべ）のこゝとを合理的に処理して行くには、飽く迄も科学的に原因結果を攻究して、それに依つて得たる知識を応用することによつて、社会及び人生の福利増進を図るのが至当である。故に万一の危険を慮（おもんばか）る場合に於ても科学的な大数計算法に基いて保険を附けるのが最も賢明なやり方である。然るに間違つて八卦や神仏に他頼（たよ）るのは愚昧なる迷信と云わればならぬ。と云つても宗教の本質を非難するものではない。宗教にも種々な迷信があるであろうが、本当の宗教心は利害得失を超越したものであると信ずる。併し私の今日の講演は利害の問題を論ずるのである。そして人生の福利増進は何うして得られるのかの問題を議するのである。この点に於て神仏は科学を超越した方法を以て人間に福利を与えることが出来ないと云う。宗教は何処までも純精神的なものである。だから神仏の前に慾張ることを許されない。畢竟する宗教の絶対価値は利害の念を超越して唯安心立命を祈願するより他はないと思う。だが併し宗教の迷信が随分多いようであるが、餘り長くなるから宗教上の迷信について兎角云々しない。要するに「科学と迷信」に就いてのみ聊か所見を述べて此の講演を終了する。

- 「科学と迷信」（神戸市立湊川商工実修学校、一九二六年十月）所収。
- 読みやすさのために、旧かな遣いは新かな遣いに変更し、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために適宜割注を附した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi}2\text{pdfmx}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。